

氏名(本籍)	菅野文彦(静岡県)
学位の種類	博士(教育学)
学位記番号	博乙第1859号
学位授与年月日	平成14年7月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	アメリカ「新教育」成立の思想的基底に関する研究 —W. ジェイムズおよびG. S. ホールに即して—
主査	筑波大学教授 博士(教育学) 山内芳文
副査	筑波大学教授 教育学博士 堀和郎
副査	筑波大学教授 博士(教育学) 清水一彦
副査	筑波大学教授 博士(教育学) 福田弘
副査	筑波大学教授 教育学博士 中村満紀男

論文の内容の要旨

(目的・対象・方法)

本論文においては、J. デューイの思想展開を正統とし、それからの距離の長短において描出されてきたアメリカ「新教育」思想史像を批判対象として、その主知主義的な傾向とは異なった思想家たち、すなわちW. ジェイムズおよびG. S. ホールらのテキストを読み込むことで、彼らの課題意識に沿って思想の形成・展開過程に分け入り、また19世紀末から20世紀始めの一般的な思想状況も視野に入れながら、「新教育」の成立を支えた思想的な基底の捉え直しを行うことが研究の目的とされている。

(論証内容)

第1章においては、19世紀末から「ゲーテ復興」と呼ばれる動向—精密科学・実証主義の進展と、それへの反動(原基への回帰や全体知への志向など)—に視点を据えて、ヨーロッパの学問・思想界や教育界における諸動向およびアメリカへの波及状況が確認される。第2章においては、直接的な課題への端緒として、W. H. キルパトリックの「附随学習」論からジェイムズ心理学への遡及が試みられている。「附随学習」の集積としての「性格形成」こそが「プロジェクト・ソメッド」の本領であることが、本章では独自に確認されている。第3章においては、そのキルパトリックの「附随学習」論に有力な示唆を与えていたジェイムズの「意識の現象学」思想の形成・展開に沿った検討が試みられている。ここにおいては、基本的には自然科学に依拠している彼の心理学が心靈研究とのきわどい境界において新たな着想を得ていたことなども確認される。また、そこでは、二次的な経験ではなく「純粹経験」のなかに身を置き、そこから各個人が主体的に真理の形成へと参与し、「可塑的な」世界に向かって能動的に働きかけること、また世界の側にもそれを保証するような「道徳性」を展望することなどの教育学的な含意も確認された。第4章においては、ホールの思想形成の過程が克明に追跡されることにより、世界を観念論的あるいは唯物論的に還元しようとする体系が両者を媒介する生命あるいは自然、そしてその進化という第三項の挿入によって重大な反省を迫られるという世紀末思想界の一般的な図式において、それが確認される。そのうえで立って、第5章においては、ホールの教育思想の課題は、科学的な帰納の方法に拠りつつ、子どもの本性を人間にとっての原型を示してくれる進化のみちすじのうえに見定めることにあったと要約される。

(結果・考察)

こうした彼らの思想的なモチーフが「新教育」の成立を支える思想的基底となることは、終章において、おむね、つぎのように結論されている。人間は「種」として、あるいは(同一の「世界」を共有・構成する)「類」として、規範性・普遍性を予定した視点でとらえられたうえで、デューイが評価される社会的・実験的な知性重視の思想とは位相に異にした自己活動の次元へと解き放たれていた、と。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文の研究史への最大の貢献は、世紀末の学問・思想界に遍在した「科学」と「神話」の緊張関係の多様な表出から生じたアメリカ「新教育」成立の思想的基底を、主としてジェイムズとホールのテキストの丹念な読み込みにおいて確認できたことにある。そこから、その実践的な知性重視の思想によってアメリカ「新教育」思想史に占めてきたデューイの決定的な位置を相対化し、ヨーロッパ「新教育」研究の一般的な動向における意識・無意識や身体などにも注目する視圏の強調と対応させる方向性がアメリカ「新教育」の研究においても切り拓かれる可能性が展望されてくる。しかしながら、その可能性は、著者の禁欲的な研究スタンスによって、いまだ可能性として展望されるにとどまっていると思われる。結局のところ、却ってデューイの基軸を再確認することになってしまうのではないかという懸念もそこからは生じかねないが、その懸念は著者の研究が直接デューイにまで及んだときの課題として期待すべきものとして先送りされよう。それは、デューイの教育思想における主知主義と主意主義との錯綜など、新たな研究上の問題を視野に収めることになるからである。

よって、著者は博士(教育学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。